

味覚的中國 旅行記

上野久子



西安の町で珍らしく人通りが少ない。

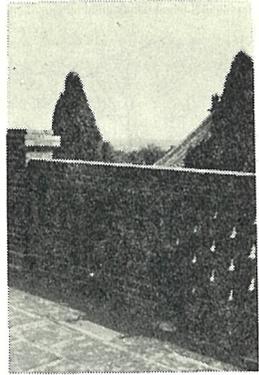
上海と大阪とはジェット機でたった二時間しか離れていない。しかし私達の乗った日航機が上海に着地し、私達をのせたミニバスが上海郊外の村道を走りはじめた時、私は日本にはない安らぎを感じた。そこには単純な線で構成された土づくりの家があり、広い畑があった。日本のように軽量の住宅と住宅にかこまれたチョッピリの畑ではなかった。莫大な畑があった。ともかくもふんだんに土があった。

このなつかしい土の匂いを中国の何処でも私はいだ。西安郊外には唐代に玄奘三蔵が印度に経を取りに行つて帰つた時、その終点であったという慈恩寺がある。ここにある塔の基部に立つて西の方を望むと、青くかすんだ楊柳の、その先の目もはるかな平原から吹く風は西域の香りを運んで来るような気がした。水と緑の豊かな上海近辺とちがって、山陝省は大木が少なく、風土は乾いているようであった。晴れた日には埃が舞い上るだろう。

外国を旅行していると「ああ、この国の匂いだな。」と思うことがある。ロンドンの街を朝歩くところからともなくだよって来る

匂いがある。香ばしく、重く、重い動物性の匂いである。朝食にベーコンをいためているのだ。私はこの匂いをかぐと一寸吐き気がするが、ロンドンに来てこれに出遭う毎に「ああ、これがイギリスの匂いだ。」と思う。今回は上海から西安までの往路は中国の国産らしい五十人乗りぐらゐの飛行機に依つた。それも案内の甘女史や陳君の大変な努力でやっと座席を確保してもらつたものらしい。その小さな飛行機に一步踏み込んだ時に私の鼻はすばらしい揮発性の植物の香気を吸い込んだ。積荷の中にニラかニンニクがあったのだろが、ともかくあの「葷酒不許入山門」の葷である。白くみずみずしいニンニクの鱗片をすぐに思わせる、ツンとしたすばらしい匂いであった。その時私は「ああ、これは中国だ」と思った。西安までの五時間はこの匂いで楽しかった。

食べものといえば、この度の旅行では一客一万円もするような(というところは中国女子店員の月給の約半分もする)豪華な中華料理に出遭つた。訪中旅行中、私達はたえず二つのレベルを感じずにはいられない。一つは私達旅行者のレベルであり、今一つは一般中国



西安市慈恩寺大雁塔基壇から郊外の平野を望む

の人たちのレベルである。この二つは隔絶しすぎていて、上のレベル、つまり豊富と安楽で遇される者達にはその差は心苦しいものであり、もっと中国の人たちに近く、もっと粗食と不便で遇してほしいと思わずにはいられなかったけれど、一方甘女史や陳君の誠心誠意の接待を思うと何もうえないのであった。私はたえず自分が入国を許されてこの国を旅しているのであり、自分達はお客さんであることを感じていた。

そこで、この豪華中華料理となるのだが、幸いにもこれは日本側が設けた接待の宴であった。一度は西安で、他は上海であった。もつとも、中国側の招待宴にも珍らしいものが出た。砂漠の近くに生えるという黒い毛髪とそっくり同じような草で、これは決しておい

しいものではなかったけれど、血圧を下げるとか。日本側の招待宴は二回とも二〜三十種の料理が私達を圧倒した。心配していたような辛いものはほとんどなかったのは私達の為の料理人の配慮か知らないけれども、ともかく解放時代や文革の間もこんなに高度な料理の技術が死なないで伝えられて来たのだ。本当のベキングダック（つまり身がほとんどなくて主として香ばしい皮が供されるもの、これを薄餅に包んで食べる。）であるとか、魚や兎、豚の形にひねったシューマイとか。上海では「仏さんが壁を破って飛び出す」という名前の料理にお目にかかった。あまりおいしそうなので、仏さんがたまらず、壁をやぶって食卓に加わるといふ美味空前絶後の料理だそうで、なるほど饜のヒレ、鳩の卵など貴重な材料を豊富に入れて壺で煮たものであった。ただ残念なことには最後のコースで出たので、半分ほどは食べ残して、うらめしく睨むばかりであった。そうそう、西安では熊の掌が出て仰天した。少しケモノ臭かったが甘辛く煮た味は悪くなかった。

中国を旅して一つの大きな感動は古い文化財に会うことである。兵馬俑、華清池、寒山

寺、慈恩寺など。それらは遠い昔に日本の文化に血と魂を吹きこんだものの証しであり、これらの場所に立つと私は自分の感性の故郷の一つに戻ったような気がした。その一つである華清池の近くに小さな山があり、その中腹には蒋介石が張學良にとらえられた場所という洞穴がある。これは中国解放史では大切な場所であるらしく、西北大学の郭校長がわざわざ私達をそこに案内して下さった。その洞穴まではかなりの坂であるけれども、こちらとしては張學良の父張作霖が日支事変前夜日本の関東軍に謀殺されたというのが通説になっているところから、或いは郭先生の意図はそこにあるのではなからうか、と恐縮しながら、言われるままに登った。中国の名所はどこでもそうであるが、ピクニックの人達でその山路はごった返しになっている。そのところどころに老爺が座り込んで食物を売っていた。ジュースのようなものと、編んだ平籠に入れた黒い種子である。私は近付いて一片（最少の単位の紙幣）を出しその種子を指した。老爺はうなづいて紙にコップ一杯ほどを包んでくれた。

後に昼食の時に郭先生にお尋ねすると、微

笑と共に「これは向日葵の種です。」とおつしやる。ロシア文学では読んだことはあるが、中国で食べるとは知らなかった。瓜の種なら美人の齒の形容になる程中国人に好まれるらしいけれども、向日葵の種は肉が少なく、第一小さいので、面倒で食べづらく、結局バッグの中にしまい込んでしまった。後に太湖を汽船で廻っていた時に同船した米人の男性とアジア人の女性の夫婦があった。この奥さんは向日葵の種をポケットから出しては掌にとり器用に噛んでいたので、アレ、この方は本当の中国人なのだ、と感心したものである。

中国は何処でも人で一杯だけれども、特にこういう名所となると見物人でふくれ上っている。華清池もそうであった。楊貴妃が使っ



華清池に遊びに来ていた祖母と孫

たという美しいモザイクの、意外に小さな浴槽は階段状に地中にうがつてある。「春寒賜浴華清池。温泉水滑洗凝脂、侍兒扶起嬌無力」というその昔の美妃の、絹と宝玉に包まれた生活をしのんで場外に出ると、ピクニックの人達を目当てに塀の外では露店商が出ていた。何だか蒸したようなものと、豆腐のようなものである。これこそ私の食べたかったものだ。しかし「食べたい」というのはどうも案内の甘女史を当惑させるのではないかという遠慮からとうとう云い出せませんでした。今でも心残りである。

まだ心残りはある。中国の町々には町営食堂らしいものがある。簡単な食事をするこゝとができるらしい。同行の中国通のお話では朝の出動途上一寸自転車から降りて、そこで売っている、ねり揚げパンのようなものを一つ二つ食べて朝食にするのだとか。本当はこれが食べたかった。

心残りはまだある。蘇州であったか、ミニバスで走っていると町角の所々でステッキのようなものを売っているのが目についた。「何でしょう」と私がいうと、三木先生や笹

田先生が「あれはサトウキビですよ」とおっ

しやる。なる程その通りなのだ。そのお答えを聞いた瞬間に私の心は何十年も前の私の幼女時代の田舎にもどった。私の田舎でもあの頃は甘蔗を子供達がしゃぶったものだった。あれはどこから来ていたのだろう。台湾産だったのだろうか。あの固い竹のような茎をしゃぶったものだった、と思うと同時に私の口の中にはあの、くどく甘いものが拡がった。けれども車を停めてもらうことには遠慮があった。

一つ思い切って買ったものがある。上海で、ミニバスがかなり長い間、あるビルの前で待つていた時、通りの向い側に菓子屋というか、パン屋というか、中国式クッキーを何種類も売っている店に気が付いた。私はこれを買って買った。言葉の通じない国で自分でお金を出して、品物を指せば目的は達せられる。そう思った私はバスから降りて向いの店に駆けつけたが、たちまち甘女史に追いつかれてしまった。それはともかく、その店の心をそえられる幾種類のクッキーは何れも恐ろしく安価で、私は四〜五箇を買って一角（約十三円）を出したが、かなりおつりがあったように記憶している。重曹の匂いのか



蘇州留園の茶店で
いこう親と子

り強い、それ故に昔なつかしいその大型のクッキーは、脂肪分はあまり入っていないが、甘味たっぷりです、私は見物しながら、時々かじった。

蘇州でも無錫でも、名園には見物客の為に園内の亭などで茶と、シューマイのようなものを売っているがこれも恐ろしく安いものらしい。私がどうも食べて見たくてたまらなくなって買ったシューマイは三つで一角だったか。蒸し立てのホコホコの皮の中に、これはまた、極めて獣臭い脂の玉が入っていた。人の好みというものは不思議なもので、その時のシューマイを一緒に上つた方たちの中では三木先生や笹田先生は「あんなおいしいシューマイは食べ始めだ」とおっしゃるし、稲垣さんや私に云わせれば「皮はすばりしかった

が、中味の脂玉はケモノ臭くて到底口に入らなかった」という評価であった。

食物の話のついでに美人の話。旅行に出る前に、ある日本人で戦前に天津にいたという人から「中国には化粧の有無に拘らず、ゾツとするような美人がいますよ」と言われて、大いに期待していた。けれども上海でも蘇州でも私が思っているような中国風——というのには細面の、色の抜けるように白い——

美人には出会わなかった。名園は若い人達で湧き返り、皆一様に紺の人民服であったが、矢張り女性はその下に赤いブラウスを着込んで

だりして女性らしさの演出に努力していた。そこには若々しい健康な顔があった。細面の楚々たるものでなく、むしろ丸顔の、精神なきつい顔が、それはそれとして魅力があった。カメラが今やステータス・シンボルらしく、首から吊す海鷗（カモメ）マークのカメラで連れの女性を撮っている若者の姿があちこちに見られた。撮られる女性は誠に誇らかに衆人の目を意識してポーズを取っている。

そんな女性の中でも無錫の園内で写真の為にポーズをしていた女性を私は忘れることができない。年は十八か十九歳位だろうか。丸く

大胆な顔に燃えるような目をしていた。多分貴重品だろうと思われる色とりどりの毛糸で編んだ帽子をかぶり、衆人の環視を受けて、折しも咲きそめたアンズの梢に手をそえて立つたその若さにあふれる誇らしげな姿は見事な絵であった。この女性は写真を撮られる、ということに何と強い喜びを感じていたことか、日本ではもう写真をとられることにこれほどの感動はないのだ。

帰ってから私は、ほとんど同じ頃に中国に旅行したイギリス人の奥さんと話していて、感想を尋ねられた。「日本やヨーロッパ、アメリカは豊かになりすぎてその文化の中には病気の部分が沢山あります。中国は私達がたどった道をたどらないようにと願います」と私はいった。「私もそう思う。けれども中国は同じ道をたどるかも知れない」とその人は言った。

（上野総長夫人）